

教師の意識の変化

—1991 年と 2002 年教師調査の比較—

小島秀夫（茨城大学）

問題

人々の一般的な意識のみならず、ある特定の職業集団の意識の変化を解明することは、すぐれて社会学的研究課題である。しかしながら、教師については、教師の意識がどのように変化しているのかという研究は少ないのが現状である。教師を対象とした個別の意識調査は実施されているが、教師の意識の変化に注目した研究は少ない。このことは、これまでの教師研究をレビューすることで理解できる。本研究の目的は、1991 年と 2002 年に茨城県内において教師を対象として実施した意識調査のデータを利用して、教師の意識の変化の解明を試みることである。

データ

使用するデータについて説明しておこう。使用するデータは大きくは 1991 年と 2002 年のデータの 2 種類であるが、2002 年のデータはやや特殊である。1991 年のデータは茨城県内の一般教師 2000 名を対象とした調査であり、郵送調査法を使用し回収率は 68.2%となった。2002 年の調査も 1991 年の調査と同一の枠組みで調査を実施したものであるが、ランダムに抽出した 2000 名を、質問項目の位置が回答に与える影響を調べる目的のために、1000 名にはオリジナルの調査票を使用し、他の 1000 名には質問項目の位置を変更した調査票を使用した。オリジナルの調査票の回収率は 60.9%、変更した調査票の回収率は 61.1%であった。2002 年調査全体の回収率は 61.0%であった。2002 年のオリジナル版と変更した調査票の内容はほぼ同じである。分析では以下に述べる理由によって、1991 年調査と 2002 年オリジナル版、1991 年調査と 2002 年変更版、1991 年調査と 2002 年全体版（オリジナル版と変更版を合計したもの）を比較す

ることとする。以下では、1991 年の調査を 91 年調査、2002 年のオリジナル版を 02 年 A 調査、変更版を 02 年 B 調査、全体版を 02 年 T 調査とよぶこととする。

比較上の問題

2002 年調査は A 調査と B 調査に分けて実施されたが、2 つの調査で基本的属性などについては差は認められなかった。しかしながら、質問項目の位置の変更によって回答に差が認められるものがあることが、分析の過程で明らかにされた。ここでは、そのいくつかを紹介しておこう。2002 年調査では「あなたは、以下のような気分になることがどの程度ありますか。それぞれについて答えてください」と質問し、「疲れやすい」「安眠できない」など 10 項目を用意し、それぞれに対して「よくある」「たまにある」「あまりない」「まったくない」の選択肢の中から 1 つを選択してもらった。その結果、「疲れやすい」が質問群の最初に位置している場合の「よくある」の比率は 44.0%であるのに対して、質問群の 6 番目にある場合の「よくある」の比率は 18.2%となり、大きな差が存在することが明らかにされた。また、「あなたは、以下に示されているような悩みを現在持っていますか。あてはまるものにくくつでも○印をつけてください」と質問し、「毎日の校務に追われて、授業の準備や生活指導が十分できないこと」など 12 項目を用意し、該当するものすべてを選択してもらった。この結果では「自分の子供の教育や家族の問題」の比率は、質問群の 6 番目にある場合の比率が 36.6%であるのに対して、最初にある場合には比率は 42.7%であることが明らかにされた。このように、質問項目の位置によって回答に差が認められる場合があるため、91 年調査の質問項目の順序に対応している 2002 年調査

で変化を測定することとする。このことは意識の変化を測定する場合には、質問文が同一である必要があるばかりではなく、質問文の位置も同一である必要があるということを示唆するものである。また、意識に変化が認められたといった場合でも、それは意識の変化を反映したものではなく、ただ単に調査方法の差を反映したに過ぎないということも考えられる。残念ながら、われわれの現在の知識では、どうした質問項目の順序の場合に差が出現するのかを予想することはできないが、こうした点は意識の比較の場合には留意すべき点であろう。

分析結果

(1) 教師が体験した困難

最初に教師が体験した困難についてみてみることにする。91年調査では「あなたは過去1年間に、以下のような問題にかかわり、困難を感じたことがありますか。あてはまるものにいくつでも○印をつけてください」と質問し、「生徒の非行」や「生徒の校内暴力」など5項目を用意し、該当するものすべてを選んでもらった。2002年調査でも質問文を同一とし、「同僚からのいじめ」などの質問項目を増やし、質問した。同一の項目についての結果が表1に示されているが、「生徒間のいじめ」と「生徒の非行」の比率が減少し、「不登校生徒」の比率が増加していることが明らかにされる。

表1 教師が体験した困難

内容	(a)91年調査	(b)02年 T 調査	(c)差
非行	29.0%	24.2%	-4.8
不登校	44.8	48.4	3.6
校内暴力	7.5	7.0	-0.5
家庭内暴力	2.8	2.3	-0.5
いじめ	32.8	24.2	-8.6

(2) 不安感

91年調査では、教師の不安感を測定する目的で「あなたは、次のような事柄について不安を感じるようなことがどの程度ありますか。それぞれについて教えてください」

と質問し、「教育の管理化が進み、自分の思うようなことができなくなるのではないかと不安」や「受験競争がさらに激しくなり、学校教育が受験教育中心になってしまうという不安」など10項目を用意し、それぞれについて「よくある」「たまにある」「あまりない」「まったくない」の選択肢の中から1つを選択してもらった。2002年A調査でも同一の質問順序で同一の質問文で質問がなされている。ここではスペースの関係で全体の結果を示すことはせず、 χ^2 検定を実施し、 χ^2 値が50以上の項目のみに注目することとする。分析の結果以下の4項目が統計的に有意な差があることが明らかにされた。

(a) 受験競争がさらに激しくなり、学校教育が受験教育中心になってしまうという不安。

調査年	よくある	たまにある
91年調査	30.8%	50.5%
02年A調査	7.4	36.8

(b) 学校の力では対処できないような問題が多く発生するようになるのではないかと不安。

調査年	よくある	たまにある
91年調査	14.9%	46.1%
02年A調査	22.0	55.0

(c) 家庭の教育機能が低下し、より深刻な問題が起きるのではないかと不安。

調査年	よくある	たまにある
91年調査	29.4%	49.4%
02年A調査	46.6	45.8

(d) 学校という世界にいるために、自分の視野が狭くなってしまうのではないかと不安。

調査年	よくある	たまにある
91年調査	40.1%	44.8%
02年A調査	25.5	46.8

ここでの分析では、教師は家庭機能の低下に不安を感じ、より深刻な教育問題が発生するという不安を抱いてはいるが、受験教育への不安は低下していることが明らかにされる。